

診療所教育を実践する医師にとっての 真のインセンティブと大学への要望

武田裕子¹⁾ 大西弘高²⁾ 藤原靖士³⁾ 内山富士雄⁴⁾ 白浜雅司⁵⁾ 松村真司⁶⁾

1)琉球大学医学部附属病院地域医療部
2)国際医学大学、マレーシア
3)奈良県月ヶ瀬村国保直営診療所
4)内山クリニック
5)佐賀県三瀬村国民健康保険診療所
6)松村医院・東京大学医学教育国際協力研究センター

【研究の背景】

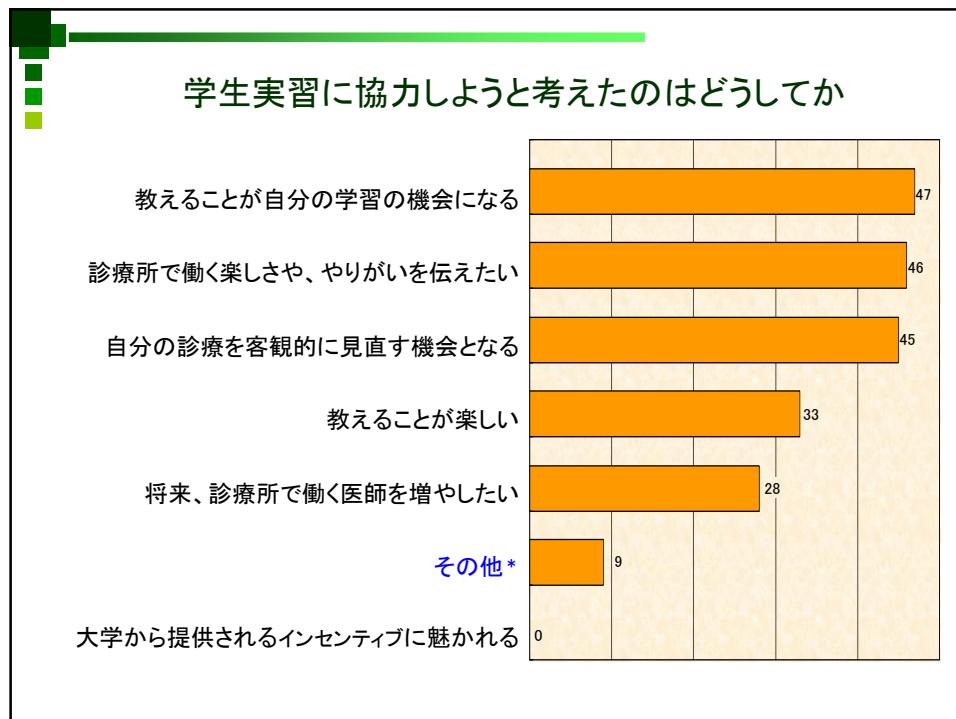
診療所教育の意義が正しく理解され、実習が円滑に継続して行われるには、学生を派遣する大学と受け入れる診療所との相互理解が不可欠である。

【研究の目的】

診療所医師が積極的に学生教育に協力する理由および学生受け入れに際して必須と考える項目を調査し、学生を派遣する大学が取り組むべき課題を明らかにする。

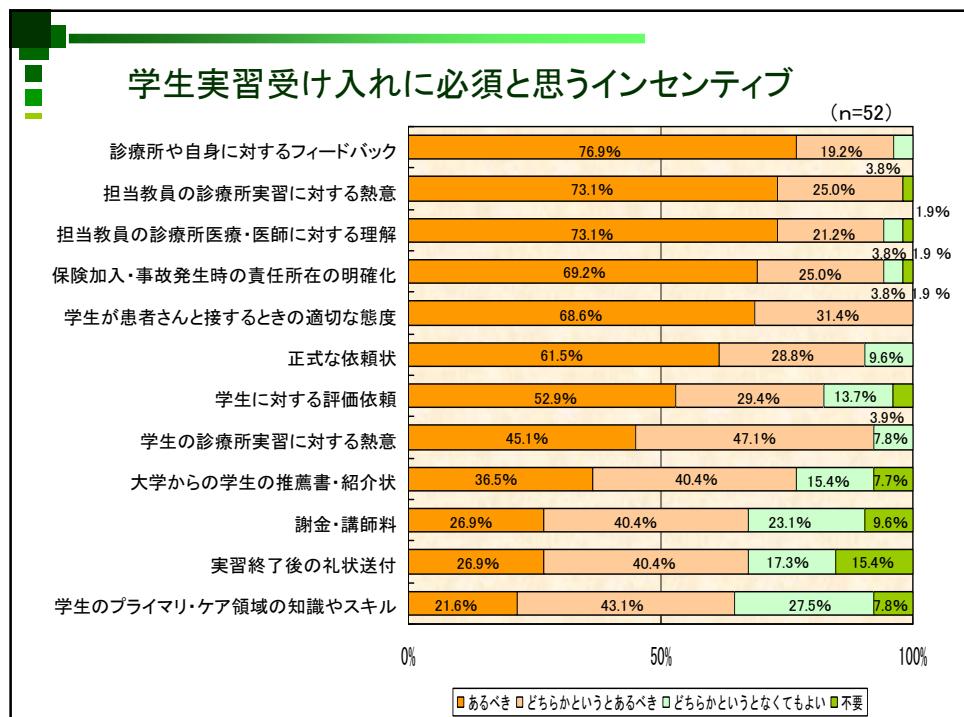
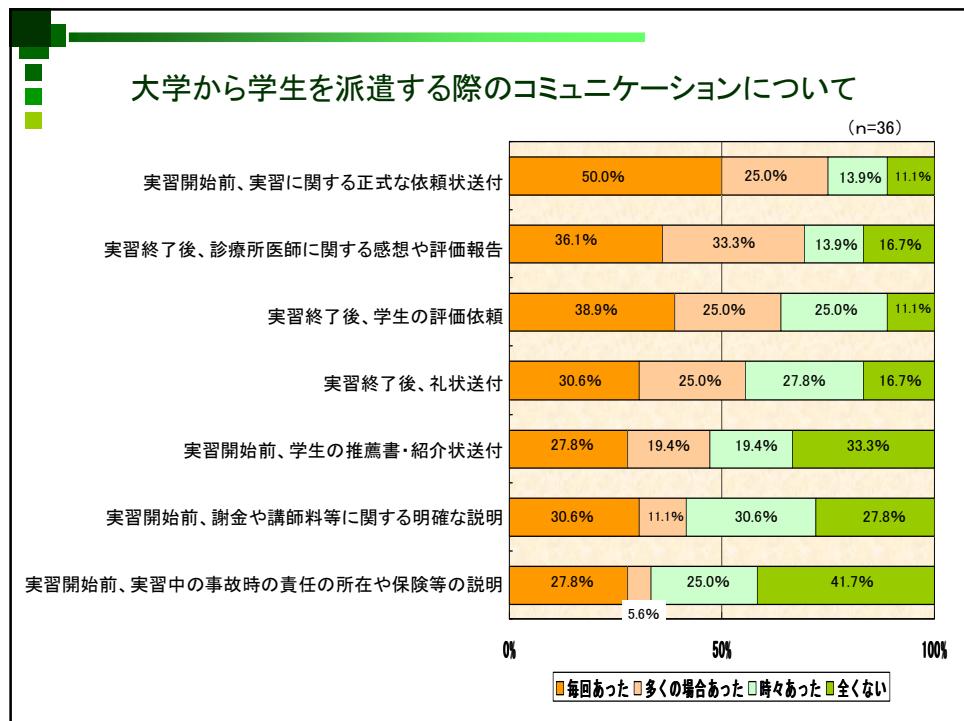
【研究の方法・対象】

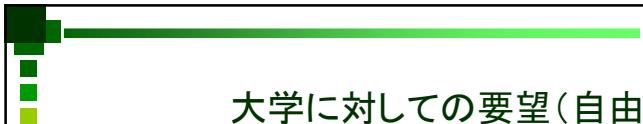
演題P-108を参照



その他*のコメント(自由記載)

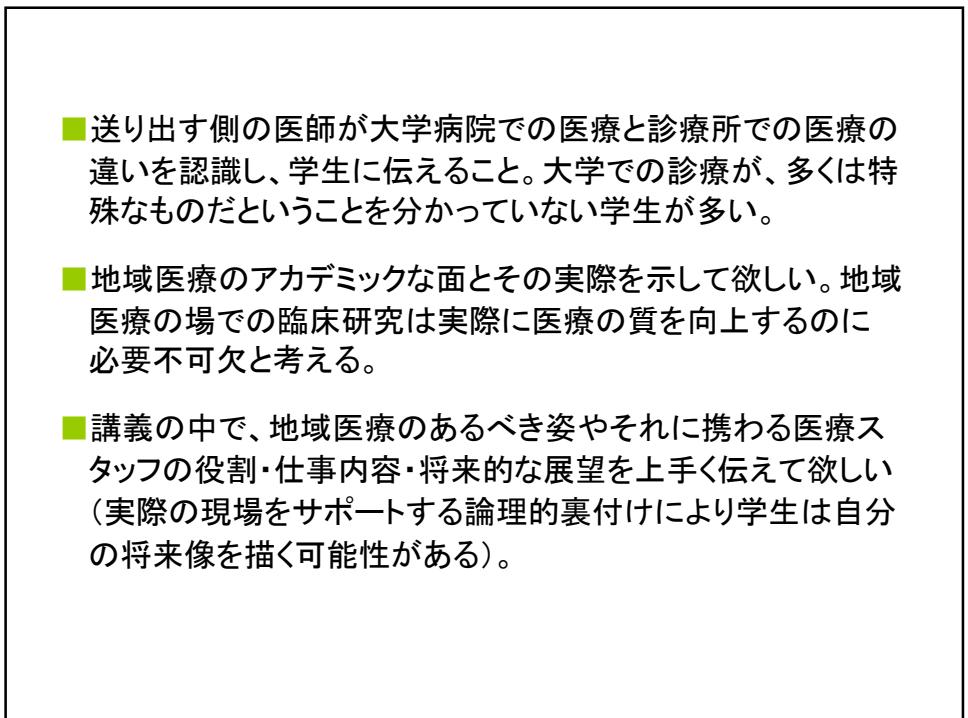
- 将来のプライマリ・ケア医を育てたい
- 診療所で働くことのやりがいを早い時期に理解してもらいたい
- 違う環境の家庭医療に触れてもらいたい
- 病院医となる者にも診療所の真の「姿」を若いうちに知って欲しい
- 先輩に教えていただいたことに対するお礼と義務感
- 日本に在宅医療を普及させる社会的使命があると思う
- 大学教員にプライマリ・ケアの実態そして価値を確認してもらいたい
- マンネリの打破





大学に対しての要望(自由記載)

- プレアンケート等を実施し、学生のプロフィールやエッセイなどを事前に送って欲しい(学生の興味・質について知っておきたい)。
- 関心の低い学生受け入れはストレスになる。
- 単に学生を「ばらまく」のではなく、受け入れ側との密な連携、フィードバックができるようにしてほしい。
- 実習機関認定証や学生実習協力願いのポスターはぜひ依頼元で作って欲しい。
- 教員も是非、見学に来て欲しい。

- 
- 送り出す側の医師が大学病院での医療と診療所での医療の違いを認識し、学生に伝えること。大学での診療が、多くは特殊なものだということを分かっていない学生が多い。
 - 地域医療のアカデミックな面とその実際を示して欲しい。地域医療の場での臨床研究は実際に医療の質を向上するのに必要不可欠と考える。
 - 講義の中で、地域医療のあるべき姿やそれに携わる医療スタッフの役割・仕事内容・将来的な展望を上手く伝えて欲しい(実際の現場をサポートする論理的裏付けにより学生は自分の将来像を描く可能性がある)。

■【結果のまとめ】

診療所教育を実践する医師にとっての真のインセンティブ

- 教えることが自分の学習の機会になる
- 診療所で働く楽しさや、やりがいを伝えたい
- 自分の診療を客観的に見直す機会となる

学生を派遣する大学側に求められること

- 診療所や医師へのフィードバック
- 担当教員の診療所医療・医師に対する理解
- 担当教員の診療所実習に対する熱意
- 学生が患者さんと接するときの適切な態度
- インセンティブの検討(認定指導施設証、生涯教育の優待、臨床教授等のタイトルなど)

■【考察】

- 円滑な診療所実習の実施には、実習担当教員の理解や熱意が必要である。また、診療所や医師に対する建設的なフィードバックの提供が、診療所教育の継続に不可欠である。
- これらは、地域保健・医療研修などで研修医を派遣する管理型研修病院にも共通するといえる。